『リトル・ドリット』におけるヒロインの人物造形再考
―イアン・ワットの『ロビンソン・クルーソー』批評との比較分析―

福　原　朋　子

はじめに

文学は、時代を超えて人間の複雑な本性を映し出す鏡の役割を果たし、登場人物の複雑さやその動機に光を当てる。本稿では、チャールズ・ディケンズ（Charles Dickens, 1812-1870）の『リトル・ドリット』（*Little Dorrit*）におけるエイミー・ドリット（Amy Dorrit）に対する描写と、イアン・ワット（Ian Watt, 1917-1999）の『ロビンソン・クルーソー』に対する洞察に満ちた解釈との比較分析を行う。限りない欲望と絶対的自由の追求がもたらす結果と格闘する、経済的個人主義の典型としてのクルーソーをワットは考察したが、彼のこの批評を『リトル・ドリット』のヒロインの解釈と比較することで、ディケンズがエイミー・ドリットを描くニュアンスが理解できると考える。クルーソーとエイミー、この二人の人物を並置してみると、18 世紀の孤島と 19 世紀のイギリス社会という一見異質な小説世界が心理的・社会的な結びつきをもつことに気付くのである。

ワットは、無人島でのクルーソーの孤独を、現代人を悩ませるあらゆる欲望からの意図的な退避として批判的に見ている。孤立してこそ、人はあらゆる束縛から真に解き放たれるという主張は、エイミー・ドリットがマーシャルシー監獄に固執するというその心理を検証する上で、有効な見解を提供してくれる。ディケンズのエイミーはワットが分析するところのクルーソーと同様、物理的な束縛が解けたとしても、社会的な期待や個人的な欲望が残ることを示唆しているように思える。本稿では、エイミー・ドリットの、一見無私無欲の行為と見える行動の動機と、彼女の意識におけるマーシャルシー監獄の位置づけの複雑さを解明し、エイミー・ドリットが無私無欲の天使であるという、多くの読者の先入観に挑戦する。ワットによって解析された、クルーソーに見られる近代人の精神構造と似て、エイミーの人物造形が、人間の経験に内在するエゴイ

ステイックな衝動と結び合った天使の如き無私無欲という、興味深い二面性を内包していることを実証する。さらに、クルーソーの実存的探究とエイミー・ドリットの謎めいた監獄への執着との関連性に注目すれば、個人主義と欲望の隠された側面とのつながりを指摘できるのではと考える。この比較分析を通じて、ワットの批評の時代を超えた妥当性を明らかにするだけでなく、ディケンズが描いたエイミー・ドリットという人物の解釈に新たな視点を提示し、エイミーという人物像がクルーソーと共に、近・現代社会の人間の葛藤に共鳴する普遍性を持つことを明らかにしていく。

Ⅰ お金と自由

この節では、まず父親ウイリアム・ドリット（William Dorrit）、つぎにアーサー・クレナム（Arthur Clennam）、それぞれの関係においてエイミーがとった行動を検証し、その動機を探る。

エイミーは監獄生活で自由を享受していた。エイミーが不自由を感じるとすれば、それは家族の貧困であろう。やがてエイミーは、経済観念に乏しい父親に代わり家計を担うことになる。放任主義の父親は、エイミーになんの教育も施さなかった。ゆえに、エイミーに優れた経済感覚を授けたのは家族の貧困であると言っても過言ではなかろう。

この永遠に続くと思われた「自由な」獄中生活に変化の兆しがさす。父の出獄が可能になるとの知らせを受けたのである。入獄以前の父親は善人であったと聞いていたエイミーは、父の出獄の知らせを単純に喜ぶ。

> ‘I shall see him, as I never saw him yet. I shall see my dear love, with the dark cloud cleared away. I shall see him, as my poor mother saw him long ago. O my dear, my dear! O father, father! O thank God, thank God!’ (440)

この時点で、エイミーは、父親の出獄が彼女の自由な監獄生活に重大な変化をもたらすとは考えていない。なぜなら、エイミーは、これまで家族運営をする上で最大の難点であった父親の性格上の問題が、これで解消できると思ったからである。この時のエイミーは、（監獄生活における）彼女の自由には実は優

柔不断な父親の存在が不可欠であることに気付いていない。

ところが、間もなく、父の出獄を可能にしたのは、父が見知らぬ遠い親戚筋から遺産相続したお金によるものだと知り、エイミーは不満を漏らす。

> ‘It seems to me hard,’ said Little Dorrit, ‘that he should have lost so many years and suffered so much, and at last pay all the debts as well. It seems to me hard that he should pay in life and money both.’ (444)

父の出獄の際、入獄の原因になった借金をも父が払わなければならないことに不満をもらすエイミーのこの発言を、彼女の「心のしみ（speck）」「心の迷い（confusion）」（444）とすることに、田中孝信氏は、エイミーの善性を擁護し「監獄内の堕落がヒロインの心をも蝕んでいる」（180）と述べる。なぜなら「完璧とすら思えたヒロイン」（180）は概ねお金のことなど口にするはずがないと考えるからである。しかし、エイミーは文字通りお金に言及しているのである。彼女が問題にしているのは、誰がその代金を払うのかということである。前述したように、エイミーはこれまで家庭内のお金の出入りをすべてひとりで管理してきた。したがってエイミーは、父自身のお金（彼が得た遺産）で出獄することが家族内における彼女の権限を侵すことになると考え、不満を述べたのである。

マーシャルシー出獄の日、エイミーは父のお金で新調した服に着替えず、着古した衣服のままその日を過ごす。エイミーが着古した衣服に執着することに関し、ナタリー・マックナイト（Natalie McKnight）は、エイミーが衣服を家族に「自分が誰であるか（identity）」を示すための手段と考えている点を指摘し、エイミーが機会あるごとにアーサー・クレナムに衣服の話を持ち出す「傾向（tendency）」についても言及している（117）。このようなエイミーの誇示行動は、アーサーには通じるが、「世俗的（worldly）」な家族には「愚かな行為（foolishness）」としか映らない。その人の「人物」を見極めて行動するエイミーの能力は父娘関係からも証明されている。したがって、この場面での「アイデンティティの象徴としての衣服」は、着古した衣服ではあろうが、彼女の自我の主張はむしろ、父親のお金で買った新しい衣服を拒否するという行為に

表現されており、ここにエイミーの動機が読み取れる。

社会復帰した父親は娘たちに上流階級のマナーを学ばせるためにジェネラル夫人（Mrs. General）を雇う。しかしエイミーだけには、この教育の効果は上がらず、彼女の生活態度は変わらない。父親は、エイミーの態度が過去の監獄生活を思い起こさせることに苛立つ。エイミーの生活態度全般に関して、エリザベス・ラングランド（Elizabeth Langland）は、エイミーの生活態度が中流階級のそれと一致している点を指摘している（97）。その一例として、ラングランドは、エイミーが監獄内における父親の社会的地位を保つため、彼の生活環境を整備していたことをあげている（98）。確かに、監獄内におけるエイミーの父親への行為は彼の社会的地位を守るためのものであり、それは中流階級のものである。しかし、監獄生活で父親を守ったエイミーの行動は、出獄後には、逆に、今や上流を志向する父親の社会的地位を脅かす行動になっている。すなわち、エイミーの行動の動機を中流階級の生活態度だけに求めることには無理がある。父親がお金で雇ったジェネラル夫人の指導に渋々従うエイミーの行動にこそ彼女の動機が窺える。つまり、エイミーは父親が自分に代わって管理する不自由な生活が不満なのである。

エイミーの行動にストレスを感じていた父親は、ついに精神のバランスを崩し、自ら過去の監獄生活へと回帰する。幻覚のなかで、「マーシャルシーの父（Father of the Marshalsea）」（678）に戻った父親は、かつての監獄生活でやり残したことを次々と実行に移していく。

> At length he roused himself to explain that he wanted money to be raised on this watch. He was quite pleased when she pretended to take it away for the purpose, and afterwards had a relish for his little tastes of wine and jelly, that he had not had before.
>
> He soon made it plain that this was so; for, in another day or two he sent off his sleeve-buttons and finger-rings. He had an amazing satisfaction in entrusting her with these errands and appeared to consider it equivalent to making the most methodical and provident arrangements. After his trinkets, or such of them as he had been able to see about him, were gone, his clothes engaged his attention;

> and it is as likely as not that he was kept alive for some days by the satisfaction of sending them, piece by piece, to an imaginary pawnbroker's. (680)

獄中生活で父親がしたくてもできなかったことは、自らのお金で家族を養うことである。それは、父親が、彼の腕時計を質屋に持って行き換金するように命じたあと、これまでになく美味しそうにワインを飲み、同様に自分の持ち物を次々と質入れすると、至極満足そうな顔をしたことからも窺える。もし、父親がマーシャルシーの生活に不自由を感じていたとすれば、その不自由の原因は、エイミーが彼に代わって家計を管理していたことである。

父亡き後、エイミーの関心はマーシャルシーに収監されているアーサー・クレナムに向けられる。アーサーに関しては、彼が性格的にエイミーの父親に似ている点に注目したい。クレナムが過去にエイミーの愛を素直に受け入れられなかったのは、アーサー自身の優柔不断な性格にあるという言及がある（793）。エイミーは父親から相続したお金でクレナムを自由にしたいと申し出る。当初その申し出に対しアーサーは彼らしい曖昧な表現で断るが、一方で、エイミーの父と同様、男の沽券にもこだわっており、つぎに、現在の二人の金銭的優劣という具体例を挙げエイミーの申し出をキッパリと断る（793）。エイミーはかつて模範的娘として父親を完璧に保護したように、アーサーも模範的妻として同様に手厚く面倒を見たいと願う。それを叶えるためには、エイミーは二つの課題を解決しなければならない。ひとつ目は、エイミーがアーサーよりお金持ちであってはいけないこと。ふたつ目は、彼が優柔不断な性格になった原因を突きとめることである。エイミーがアーサーと結婚する上で優先すべきは前者であろう。後者に関して、それがエイミーにとって解決すべき問題か否かは、彼女の最後の行動で明らかになる。

エイミーはクレナム夫人（アーサー・クレナムの養母）への脅迫状を手に入れ、アーサーとの結婚問題を解決する糸口を掴む。その脅迫状には、アーサーが優柔不断な性格になった原因と、その事に関連して、クレナム家の財産の一部がエイミーに渡されることになっていたことが記されている。クレナム夫人はエイミーが受け取るべきお金を掠め取っていたのである。それゆえ、その脅迫状をアーサーに読ませるか否かの判断は総てエイミーに委ねられる。エイミー

は早速ミーグルズ氏（Mr. Meagles）に依頼し、その脅迫状の元になった文書を手にする。その文書には、エイミーに関すること、そしてアーサーに関することが書かれている。エイミーにも関わる遺産相続問題がアーサーに知られていないことにエイミーは安堵する。なぜならクレナム家のエイミーへの借財は、彼女がアーサーより金持ちであることの証であるからである。一方、言及されているアーサーの出自と養母に育てられた経緯については、エイミーは彼に知らせるべきであると考える（845）。つまり、この時点で、エイミーはクレナム夫人への脅迫状をアーサー自身に読ませるつもりであったことがわかる。

このように、アーサーとの結婚の障害であったお金の問題を取り除いた後、エイミーは亡き父の破産に伴い自分を含めたその家族も無一文になったことを誇らしくアーサーに伝える。アーサーはエイミーの求婚を静かに受け入れる。エイミーは歓喜のうちに彼女の思い描く結婚生活を語るが、その中で彼女がアーサーに期待することが示される。

> Never to part, my dearest Arthur; never any more until the last! I never was rich before; I never was happy before. I am rich in being taken by you, I am proud in having been resigned by you, I am happy in being with you in this prison, as I should be happy in coming back to it with you, if it should be the will of God, and comforting and serving you with all my love and truth. I am yours anywhere, everywhere! I love you dearly! I would rather pass my life here with you, and go out daily, working for our bread, than I would have the greatest fortune that ever was told, and be the greatest lady that ever was honored. Or, if poor papa may only know how blest at last my heart is, in this room where he suffered for so many years! (850)

エイミーにとって「豊か（rich）」で「幸せ（happy）」な人生とは、アーサーと一緒に監獄で過ごすことである。その監獄生活で、アーサーはエイミーの「愛と誠（love and truth）」で慰められる日々を過ごし、他方、エイミーは、「毎日パンのために働きに出る（go out daily, working for our bread）」生活を送る。これは当に、かつて父親と過ごした監獄生活の復活である。エイミーは、亡き

父親の代わりにアーサーをもってその監獄生活を再現しようとしているのである。しかも、エイミーは彼女の「愛と誠」で慰め続けた父親は終始不幸であったことを認識している。このことから、エイミーは自己の幸福追求のためには、アーサーの幸福を犠牲にするのも止むを得ないと考えていることがわかる。

エイミーの求婚が受け入れられ、刑務者のアーサーに愛と誠を尽くす環境が整う。そこへ共同経営者のダニエル・ドイス（Daniel Doyce）が突然現れ、アーサーの借金を返済してしまう。こうしてアーサーは出獄を果たし、エイミーとの結婚式を挙行することとなる。幸せの結婚式の朝、エイミーの手にはあのクレナム夫人宛ての脅迫状が握られている。教会に赴く前、彼女は、アーサーに関する過去の事実を、彼に明かすか否かの判断をくだす。

> ‘My dear love,’ said Arthur. ‘Why does Maggy light the fire? We shall be gone directly.’
> ‘I asked her to do it. I have taken such an odd fancy. I want you to burn something for me.’
> ‘What?’
> ‘Only this folded paper. If you will put it in the fire with your own hand, just as it is, my fancy will be gratified.’
> ‘Superstitious, darling Little Dorrit? Is it a charm?’
> ‘It is anything you like best, my own,’ she answered, laughing with glistening eyes and standing on tiptoe to kiss him, ‘if you will only humour me when the fire burns up.’
> So, they stood before the fire, waiting: Clennam with his arm about her waist, and the fire shining, as fire in that same place had often shone, in Little Dorrit’s eyes. ‘Is it bright enough now?’ said Arthur. ‘Quite bright enough now,’ said Little Dorrit. ‘Dose the charm want any words to be said?’ asked Arthur, as he held the paper over the flame. ‘You can say “I love you!”’ answered Little Dorrit. So, he said it, and the paper burned away. (857)

エイミーは、アーサーに関する過去の事実を、彼に永遠に知らせないという決

断を下す。それは、彼女が言うように「気まぐれ（odd fancy）」で決めたことではない。なぜなら、事前にマギー（Maggy）に炉に火を入れておくように命じていたからである。確かに、その脅迫状の元文書を手に入れた時点では、エイミーはその事実をアーサーに知らせる予定であった。しかし、あれから状況は変わったのである。彼らの新婚生活は、父親と暮らしたのと同じマーシャルシー監獄で営まれるはずであったが、突如アーサーの出獄が叶い、エイミーの目論見は外れる。かつての監獄生活は、父親の優柔不断な性格を助長し、エイミーに経済的自立と自由を与えた。このように、エイミーが自由を享受する新しい家族には、優柔不断なパートナーの存在が不可欠なのである。アーサーは、自分や家族に関する秘密を知らされていないが故に、このような優柔不断な性格になってしまったと自戒している。したがって、アーサーがその脅迫状を読んだならば、彼は、長年悩み続けた自らの優柔不断な性格から解放される可能性がある。それはエイミーの望むところではない。なぜなら、それは新しい家庭におけるエイミーの自由を保障しないからである。ゆえに、エイミーは、アーサー自らの手で彼の真実を炉に焼べさせることにより、かつて父親へ行ったように彼の脆弱さを放置し、新婚生活における彼女の自由を担保したのである。

Ⅱ 監獄の自由

この節では、父親やクレナムとの関係性において、エイミーがこだわり続けた監獄生活を検証し、彼女の行動の動機を明らかにする。

監獄で誕生してから過ごした数年間、エイミーは家族の経済問題に関わることなく幸福であった。看守ボブ（Bob）が子供に無関心な父親に代わり、何くれとなく彼女の面倒を見ていたからである。この時期のエイミーの幸福な風景には看守ボブの存在が大きく関わっている。

> They used to issue from the Lodge on alternate Sunday afternoons with great gravity, bound for some meadows or green lanes that had been elaborately appointed by the turnkey in the course of the week; and there she picked grass and flowers to bring home, while he smoked his pipe. Afterwards, there were teagardens, shrimps, ale, and other delicacies; and then they would come back

hand in hand, unless she was more than usually tired, and had fallen asleep on his shoulder. (85)

看守ボブはエイミーの自由に一切干渉しない。彼は週に一度、エイミーを監獄の外の広い世界に連れ出し、時にささやかな食べ物を与え、時に遊び疲れた彼女を背負って帰宅する。ボブはエイミーが自由に戯れるのを見守っているだけである。彼らは仲の良い友達であり、そのことを彼らは認識している。この時期のエイミーの幸福な風景には本来の家族の姿はない。

後年、当時の監獄生活について、エイミーは、彼女が幸福と感じる監獄生活には、彼女の自由な時間を妨害せず、ただ彼女を優しく見守るボブの存在があったと述べている（112）。

ボブの死後、エイミーは本来あるべき家族のもとで、その特有の自立心を遺憾無く発揮していく。エイミーにあって家族にないその特質とは、貧困を緩和するために働く意欲であろう。このエイミーの優れた特質について、ジョージ・ギッシング（George Gissing）は、監獄という最悪の生育環境下、彼女の優れた特質が育まれるという設定が不自然だとして疑問を呈している（150）。その優れた特質の発現に関して、ディケンズは、家族とは全く異なる面倒な方法で、彼らの貧困問題を解決するという「霊感（inspiration）」がエイミーに働いたのだと解説している（86）。ディケンズの解説が、必ずしもギッシングの疑問への答えになり得るとは思えないが、筆者はエイミーが幼児期、労働者階級の看守ボブと親しくしたことが労働を厭わないという特質を彼女に根付かせたのではないかと考える。その理由の一つとして、ボブはエイミーにおやつとして、労働者が好む「小エビとビール（shrimps and ale）」（85）を与えている。エイミーは 13 歳で家計簿を付け始め、兄姉を就職させ、自らは一家の稼ぎ頭となっている。22 歳でクレナムと出会った時分には、兄ティップ（Tip）が証言しているように、彼女は高い家賃を支払って監獄内に自分専用の個室を持つまでになっている（102）。このようにエイミーは意欲的に働くという彼女の特質を十二分に発揮し、家族を貧困の窮地から救い出し、自らの「監獄の自由」を達成する。

出獄後、親戚から莫大な遺産を相続したことで、一家は一気に貧乏生活から

解放され、エイミーのこれまでの働きは必要ないどころか、「恐怖（fear）」（501）の対象となっていく。エイミーは父親の最後を看取った後、収監されているアーサーのもとに赴く。彼に求婚するなかで、エイミーは、アーサーを監獄に置き、その間、エイミー自身は監獄の外で自由に経済活動をする生活を思い描くのである（850）。アーサーの出獄が決定的となり、「監獄の自由」の条件の一つが欠ける事態となると、エイミーはアーサーに、彼が精神的に自立するのを妨げてきたとされる家族の秘密が書かれた手紙を、アーサー自身の手で燃やすよう迫る。これにより、クレナムは自立した大人の男性になるチャンスを永遠に失う。アーサーの自立を物理的に奪うことに失敗したエイミーは、今度はクレナムから精神的な自立を奪う。エイミーが専ら自分ひとりで働くことによって得る「監獄の自由」は、家族の自由よりもエイミー個人の自由（と権力）を優先するものである。

Ⅲ「リトル・ドリットの監獄」と「ロビンソン・クルーソーの孤島」の類似点

ここまでの議論をまとめれば、エイミーの監獄への執着は、父親の出獄後、顕著にみられる。25 年に及ぶ屈辱の監獄生活から解放され、新しい生活に順応しようとする家族に対し、エイミーだけは非協力的である。幻覚の中の牢獄にある父親の臨終を看取った彼女は、至福の時を過ごしたかのように描かれている。父親の死後、投獄中のアーサー・クレナムを訪ねた彼女は、監獄内で彼の面倒をみたいと申し出る。アーサーの出獄が叶い、彼らの新婚生活は獄外になることが決定的となると、エイミーは、これまでアーサーの精神的自立を阻んできたとされる過去の秘密が記された文書を彼自らの手で焼却させる。精神的及び経済的に自立できないアーサーは一生涯エイミーに依存する「心の牢獄」に繋がれる可能性を暗示し物語は終わる。このようにエイミーの監獄への執着には、彼女の願望を叶えるための一貫した意図があるように思える。

田中孝信氏は、「監獄は、彼女が自由を拘束される場所ではなく、思う存分他人のために尽くせる精神的充足空間」（189）であり、このエイミーの「他人のために尽くす」傾向は「彼女の心理的病」（188）であると述べる。田中氏は、神経症的利他心を呈する人物の本質は利己心であるという「精神分析学上」（195）の例をあげている。監獄への執着を彼女の神経症的性格によるものだと

すれば、そこには意識された明確な意図はないということになる。

小池滋氏は、「この小説の登場人物はすべて何らかの意味での牢獄に入っており」（140）「だがエイミーは、…心理的な牢獄の汚染を蒙っていない唯一の人間である」（156）と述べ、父親が出獄する際、入獄前の借金を払わなければならないことに不満を述べたエイミーの所謂「精神的汚染」（160）について、「長い牢獄生活の結果として理屈の通らぬたわごとを思わず吐くところにこそ、彼女の天使ならぬ人間らしさ」（160）が表れていると解釈する。この小池氏の解釈の前提には、物語全体を覆う「牢獄のネガテイブなイメージ」と「天使の如きヒロインは金銭に言及しない」ことがあげられる。しかしながら、仮にエイミーが監獄にポジテイブなイメージを持ち、尚且つ金銭に大いにこだわる人物であるとすれば、エイミーの人物造形は大いに異なるものになる。

獄中生活においては、小池氏が指摘するエイミーの生来の善良さや田中氏が指摘するところの神経症的な性格は如何なく発揮されるが、出所後、エイミーの行動は家族やアーサー・クレナムの幸福実現より、むしろ自己の自由を優先させている。仮に、エイミーが、自己実現を図るための適切な場として監獄または監獄と同様な環境を望んだとすれば、これは無私無欲の愛を貫くヒロインのイメージと大いに異なることになる。こうしたエイミーの自我の在り様はイワン・ワットの分析による、経済的個人主義者としてのロビンソン・クルーソーと重なり合う。

ワットは、彼の古典的批評書『小説の勃興』（*The Rise of the Novel : Studies in Defoe, Richardson and Fielding*）（1719）中のダニエル・デフォー（Daniel Defoe, 1660-1731）の *Robinson Crusoe* の批評、「『ロビンソン・クルーソー』－個人主義と小説（*'Robinson Crusoe', Individualism and the Novel*）」において、従来の解釈とは異なるクルーソー像を提示した。ワットは、ロビンソン・クルーソーは、“economic individualism”（「経済的な個人主義」）を具現化する人物であるとし、彼の性格の “egocentricity”（「自己中心性」）が終始、孤島に漂着する運命を追い求めており、その孤島が、個人の絶対的自由を実現するための最大の機会を彼に提供したのは偶然に過ぎないと述べる（86）。

旺盛な自立心と優れた経済感覚を併せ持つロビンソン・クルーソーが、漂着した無人島で完全な自由を手に入れる物語は、誕生した監獄で、独学で得た簿

記の知識を家庭経営に活かし、自由で充足した生活を得るリトル・ドリットの物語に、その手段と目的において相通じるものがあると考える。本節では、ワットの「ロビンソン・クルーソー批評」で、ロビンソン・クルーソーが無人島で完全な自由を獲得する経緯を検証し、両者の比較を通じて監獄に固執するエイミーの意図を考察する。

ワットは、“the rise of modern industrial capitalism”（「近代産業資本主義の台頭」）が個人主義のさまざまな要素を生み出し、その一つが「経済的個人主義」であり、それが『ロビンソン・クルーソー』に最も明確に表現されていると主張する。経済的な動機を最優先し、帳簿づけや契約の法則を生来的に敬う経済的個人主義者であるロビンソン・クルーソーが、いかにして「島の支配者」となったかを見ていく。

> Book-keeping is but one aspect of a central theme in the modern social order. Our civilization as a whole is based on individual contractual relationships, as opposed to the unwritten, traditional and collective relationships of previous societies; and the idea of contract played an important part in the theoretical development of political individualism. It had featured prominently in the fight against the Stuarts, and it was enshrined in Lock’s political system. Lock, indeed, thought that contractual relationships were binding even in the state of nature; Crusoe, we notice, acts like a good Lockean-when others arrive on the island, he forces them to accept his dominion with written contacts acknowledging his absolute power (even though we have previously been told that he has run out of ink). (Watt,63-64)

ワットは、クルーソーの物語世界において、クルーソーが「簿記」とジョン・ロック的な「契約の法則」を信奉する近代人であることを指摘する。ワットによれば、ロックは、「契約」という概念が、「自然状態（the state of nature）」にあり、資本主義者が何者か、あるいは契約とは何かを知る由もない未開の地（の住民）においてもなお有効であると考えたのであったが、まさに、ロック的な模範的近代人（a good Lockean）のごとく、クルーソーは、彼の無人島に

漂着したヨーロッパの漂流民に対して、（クルーソーは紙やインクがなかったと述べていることはともかく）契約書を示して、島における彼の絶対的権限を示し、彼らを自らに服従させるのだ、と述べている。ワットは、クルーソーの経済人としての説明に、マックス・ウェーバー（Max Weber）の言説 “they pursue it very methodically according to the profit and loss book-keeping”（63）（「経済人は帳簿の損得勘定に従って、実に整然と利益を追求する」）を援用している。契約は相互の合意により成立する。クルーソーは漂流者を助けるとき、“profit”（67）（「見返り」）を確保できるかどうかを見極める。すべての権限はクルーソーに移譲され、クルーソーへの忠誠が最低限の見返りである。ヨーロッパ人については、クルーソーが島を去る時、島と自分を守ってくれるよう依頼し、契約は満了する。しかし、未開地の住人フライデーとの契約については、少し状況が異なる。ワットは、クルーソーの人生に友情や愛情は不要と考えているので、彼が求めていたのは “male slave”（68）（「男性の奴隷」）であると述べている。一方、フライデーは自分の命を救ってくれた「恩返し」として、クルーソーに一生涯服従することを誓うのである。フライデーは見返りを求めない。これは「契約」（ワットが指摘するところの文明 “civilization” の原理）ではなく、「応報の原理」（ワットが指摘するところの前文明的で共同体的 “traditional and collective” な原理）に基づくものである。なぜなら「恩返し」の履行における義務という意味では「応報の原理」は道徳的であるがゆえに「契約」に勝るからである。このように漂流者がクルーソーの島の忠臣となるには、2 つの方法があることがわかる。1 つ目は、漂流者がクルーソーの「助ける」という行為を「借り」と感じ、彼に「忠誠心」を示すことで「帳面上の事柄」を帳消しにする方法である。もうひとつは、同様の行為に対して「恩」を感じ、生涯にわたって「恩返し」する方法である。

父親をエイミーの監獄の「従順な囚人」にするために、クルーソーの方法は有効であるか考えてみたい。エイミーは独学で簿記を習い、獄外で働いた賃金をもとに破綻した家計を立て直し、兄と姉を職に就かせ、一介の囚人でしかない父親を「監獄の父」の地位にまでのぼらせる。問題は、家族がエイミーの「貢献」を「有難い」と感じるか否かである。答えは否である。そのことが顕著に現れるのは一家の出獄後である。家族は獄中生活をした過去をひたすら隠

し、あたかもずっと以前から上流階級の人間であるかのように振る舞う。それに抗うかのように、エイミーは監獄生活を彷彿とさせるような行動に出る。そんなエイミーを父親が叱責したとき、エイミーは心の中で思わず「恩知らず」と叫ぶ。エイミーは彼らに「アメ」を与えても「従順な囚人」になることはないと悟ったのである。エイミーの願いは、精神を病んだ父親が幻覚の中で初めて「従順な囚人」となったことで叶う。「従順な囚人」の第一候補であるアーサー・クレナムが投獄されたと聞き、エイミーは獄中結婚を申し出るが断られる。アーサーが出獄し、彼らの結婚が叶うと、エイミーはアーサーを「エイミーの従順な僕」にする強硬手段に出る。結局、エイミーの「契約」は、相手の合意が得られないまま不成立に終わる。現実の監獄では叶えられないエイミーの願いは、想像上の監獄でのみ叶えられる。フライデーの「応報の原理」はもちろん、クルーソーの「契約の法則」によっても、この家族にはエイミーが願ったように機能しない。出獄後のドリット家に見られる大きな変化のひとつは、エイミーが不要になったことである。監獄にいた時、家族は無意識のうちにエイミーの献身的な働きに深く依存していた。エイミーは、どんな苦難ものともせず、彼らに奉仕することに最大の喜びを見出す。なぜなら、そうすることで家庭を円滑に運営し、同時に支配することができるからである。出獄後、家族はこの依存と支配の関係から解放されるのである。

ワットは、『ロビンソン・クルーソー』の「優れた文学性」(literary greatness)が、クルーソーに見る個人主義の最も深い願望やジレンマを反映していると見る(“…the primary reason for our interest in *Robinson Crusoe* is its literary greatness, the relation between that greatness and the way it reflects the deepest aspirations and dilemmas of individualism also requires brief consideration”(85))が、この点とディケンズが描くところのエイミーにはどのような関連性が認められるだろうか。まず、エイミーにとっての監獄と相似形にあると考えられる、クルーソーにとっての島の意味を考察する。ワットの議論を見ていく。

ワットは、クルーソーの自己中心性が無人島に住むこととなったという環境の結果といえる一方で、自己中心的な性格のクルーソーが無人島に漂着したのは必然であり、彼がその島で近代文明において個が求めるところの完全な経済的・社会的・知的自由を得たことは偶然であると述べる(86)。ワットが個人

主義者の説明として、社会からの「自立」あるいは自律性を志向するといった、一般に認知されている個人主義者に加えて、社会からの「独立」を志向する自己中心的な個人主義者に言及したのは、このことへの伏線といえる。また本節で、個人主義と小説の勃興の関係を示すために、ワットは小説の主人公の個性の強さを「優れた文学性」と呼び、この優れた文学性は個人主義の激しい願望とジレンマを反映していると述べる（85）。クルーソーの場合、それは過剰な独立性であり、そのため社会から孤立する運命にあると述べる（“Yet he too has an exceptional prowess; he can manage quite on his own. And he has an excess: his inordinate egocentricity condemns him to isolation wherever he is”（86））。

『リトル・ドリット』におけるエイミーの小説の主人公としての個性の強烈さはクルーソーに並べられうる。クルーソーの利己主義とは一見真逆に見える、エイミーの父への「奉仕の精神」あるいは利他主義は、その強烈さにおいて、クルーソーに比肩する。エイミーの欲望は、精神を病んだ父の幻影の牢獄で父を独占することで満たされる。クルーソーが非社会的なまでの独立性を願ったように、エイミーは父親を独占したいと願ったのかもしれない。ワットは、クルーソーの願望が自己中心的なものであると主張する。社会からの究極の独立とは、完全に自由な個人を意味し、それは個人的な帝国の独裁者を意味するからである。同様に、エイミーの願望も自己中心的と言える。なぜなら、それは家長である父親を独占し、意のままに操ることであり、家長の特権を手にすることであり、家庭において実質的な独裁者となることだからである。そして、完全な社会的自由、すなわち、社会からの完全独立を望む自己中心的な性格のクルーソーが無人島に漂着するのが必然なら、独裁的な家庭を持つことを願う、極めて利他的に見えて実は極めて自己中心的な性格のエイミーが監獄に執着するのも必然と言えよう。同様に、クルーソーが無人島で完全な自由と孤独を得たことが偶然の産物だとすれば、エイミーがマーシャルシー監獄の中で自由を、独裁者として、家庭内での孤立的状況（家族から疎んじられる）を得たのも偶然の産物であろう。もっとも、父の出獄後は空想の監獄で父親を独占したにもかかわらず、それが空想であるがゆえ現実的な家庭を持つことを一時的に諦めざるをえなかったのだが。エイミーが監獄に執着するのは、家長である父親を独占し、自らが家長となり独善的尚且つ独裁的な家庭を持つという自己中心的

な思いからだと言える。

ワットはロビンソン・クルーソーの物語をこのように総括する。

> Follow the call of the wide, open places, discover an island that is desert only because it is barren of owners or competitors, and there build your personal Empire with the help of a Man Friday who needs no wages and makes it much easier to support the white man's burden.(87)

自分たちの世界地図に存在しない場所を「未開の地」と呼び、発見したと称して自分たちのものだと主張する。すでにその土地に住んでいる人々を「未開人」と呼び、契約という概念がないことをいいことに、無給で働かせ、開発という名のもとに自分たちに都合のいい国を作る。アメリカ大陸やアフリカに植民地を求めた帝国主義時代のイギリスを彷彿とさせると同時に、物欲を肯定する経済的個人主義が浸透した資本主義社会への警鐘となるワットの総括である。ワットは実に、『ロビンソン・クルーソー』批評の冒頭で、現代社会は比類なき個人主義社会であると述べている（60）。ワットは、おそらく、過度な個人主義社会に対する悲観的な見方を『ロビンソン・クルーソー』に投影して、資本主義社会の危うさを糾弾したのであろう。

同様に、エイミー・ドリットの物語を総括すれば以下のようになるだろう。「マーシャルシーの父」と揶揄される優柔不断な父親を、見かけだけでもまともな男にするため、エイミーは父親を徹底的に管理し、独善的で独裁的なやり方で家庭を切り盛りする。出所した父親はエイミーの干渉を嫌う。エイミーは過去の成功体験をもとに、父親を監獄にいたときの状況に戻そうとするが失敗する。幸運なことに、エイミーの欲望は、精神を病んだ父親が見る空想の監獄で一時的に満たされる。父親の死後、彼女は父親と同じように優柔不断で他人の言いなりになる男、アーサー・クレナムに狙いを定め、独善的で独裁的な家庭を持つために結婚を承諾させる。クルーソーに似て、エイミーもまた、利他主義の衣を纏った強烈な個人主義者だとは呼べないだろうか。

結論

チャールズ・ディケンズの『リトル・ドリット』とイアン・ワットの『ロビンソン・クルーソー』批評の比較分析は、人間の性格と社会批評の多面性を考えさせる。エイミー・ドリットは、しばしば無私無欲で天使のような美徳の模範とみなされるが、その動機はクルーソーの経済的個人主義と呼応する複雑な個人であることが明らかにされる。経済的個人主義というレンズを通して、ワットはクルーソーの自由追求の根底にあるエゴイズムを精査するよう促している。この批判的枠組みをエイミー・ドリットに当てはめると、彼女の表向きは利他的な行動の背後に潜む利己主義の微妙な影が見えてくる。

「監獄の自由」という逆説的な概念は、クルーソーにおける孤島での隔離と自らにもたらす社会的隔離とエイミーにおけるマーシャルシー監獄における隔離と孤立とを示すキーワードとなり、クルーソーの孤島とエイミーの監獄の比較におけるこれらのアイデアの統合は、自由を求める人間の普遍的な闘いを浮き彫りにし、孤独という個別でありながら相互に結びついた領域を描いている。経済的個人主義者の本質は自己中心性にあり、完全な自由を手に入れようとするクルーソーが孤島に漂着したのは運命であるというワットの主張は、エイミーのマーシャルシー監獄への執着と共鳴する。

ディケンズのニュアンス豊かな人物造形とワットの批評的洞察を比較させることで、18 世紀の冒険譚と 19 世紀の風俗小説との間の時間的・社会文化的境界を超えて、なおつながるテーマを解き明かすことができる。『リトル・ドリット』と『ロビンソン・クルーソー』は、一見無関係のように見えるが、社会的存在である人間の経験の複雑さを映し出す英文学の壮大なタペストリーに収斂していく。時代を超えて、ともに無私無欲とエゴイズムの間の相互作用について、我々に熟考を促す。

引用文献

Defoe, Daniel. *Robinson Crusoe*. Penguin, 2003.

Dickens, Charles. *Little Dorrit*. Eds. Stephen Wall and Helen Small. Penguin, 2003.

Gissing, George. *Charles Dickens A Critical Study*. Nonsuch Publishing, 2007.

Ingham, Patricia. *Dickens, Women & Language*. U of Toronto P, 1992.

Langland, Elizabeth. *Nobody's Angels, Middle-Class Women and Domestic Ideology in Victorian Culture*. Cornell UP, 1996.

MacKay, Marina. *Ian Watt: The Novel and the Wartime Critic*. Oxford Mid-Century Studies. Oxford UP, 2018.

McKnight, Natalie. *Idiots, Madmen, and Other Prisoners in Dickens*. St. Martin's Press, 1993.

Schlicke, Paul. *The Oxford Companion to Charles Dickens*. Oxford UP, 2011.

Tomalin, Claire. *Charles Dickens A Life*. Penguin, 2011.

Watt, Ian. *The Rise of the Novel Studies in Defoe, Richardson and Fielding*. U of California, 1957.

田中孝信.『ディケンズのジェンダー観の変遷－中心と周縁とのせめぎ合い－』音羽書房鶴見書店, 2006.

小池滋. 『デイケンズとともに』晶文社, 1993.

河崎良二.「書評 イアン・ワットの収容所生活と復員後の文学研究」ブラウザー（大阪洋書）208 号, 2019.